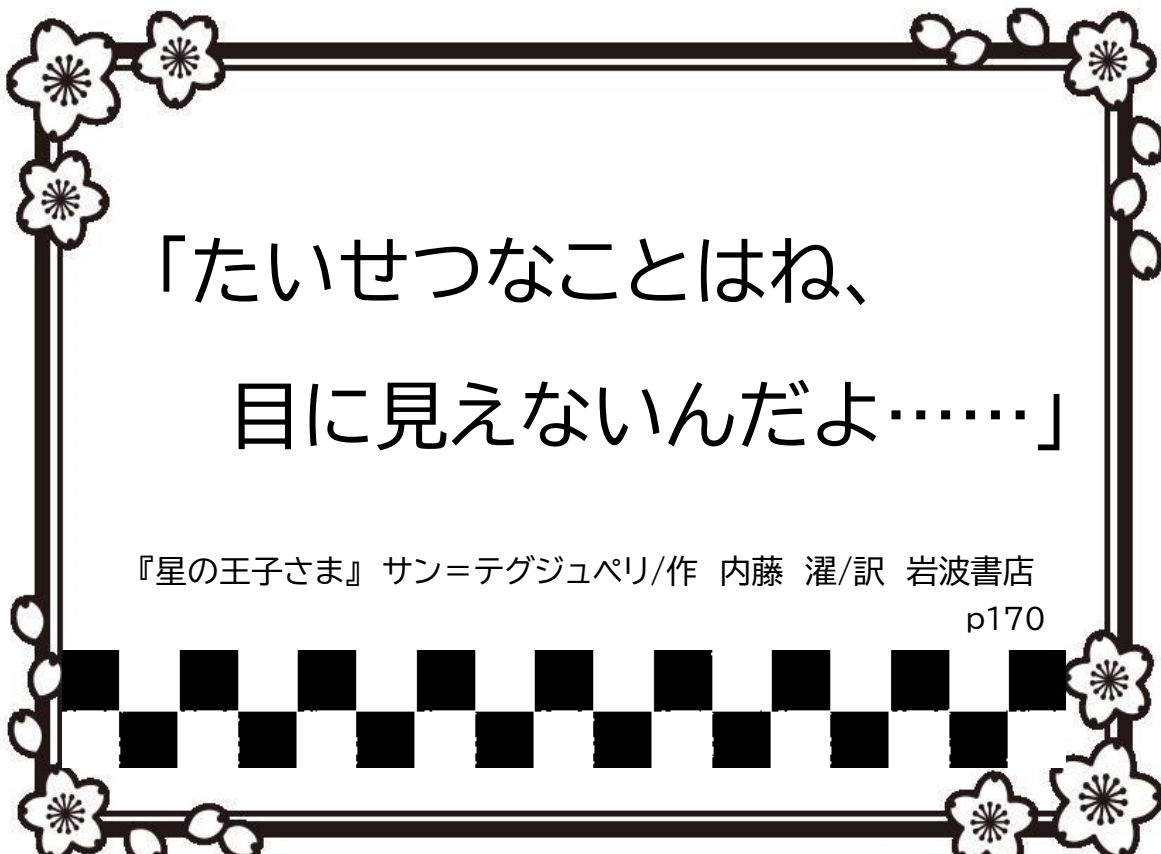
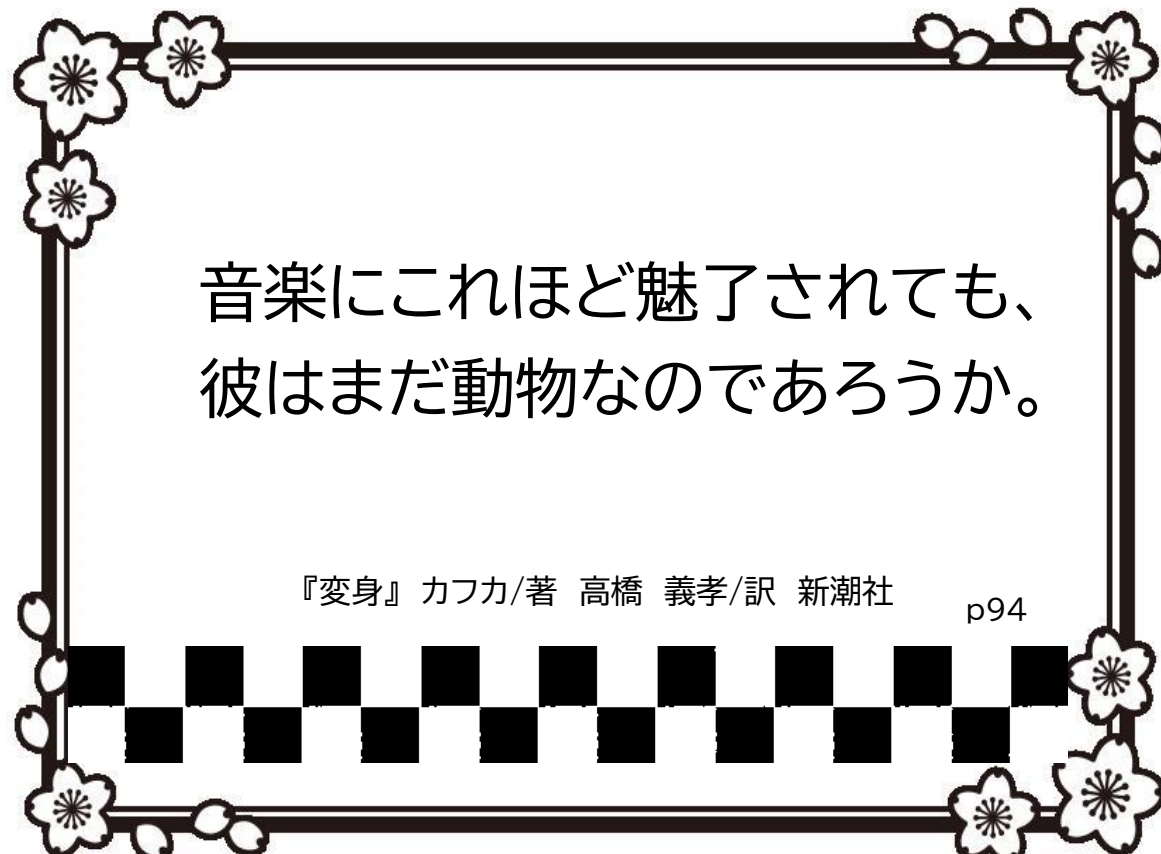




「たいせつなことはね、
目に見えないんだよ……」

『星の王子さま』 サン＝テグジュペリ/作 内藤 濯/訳 岩波書店

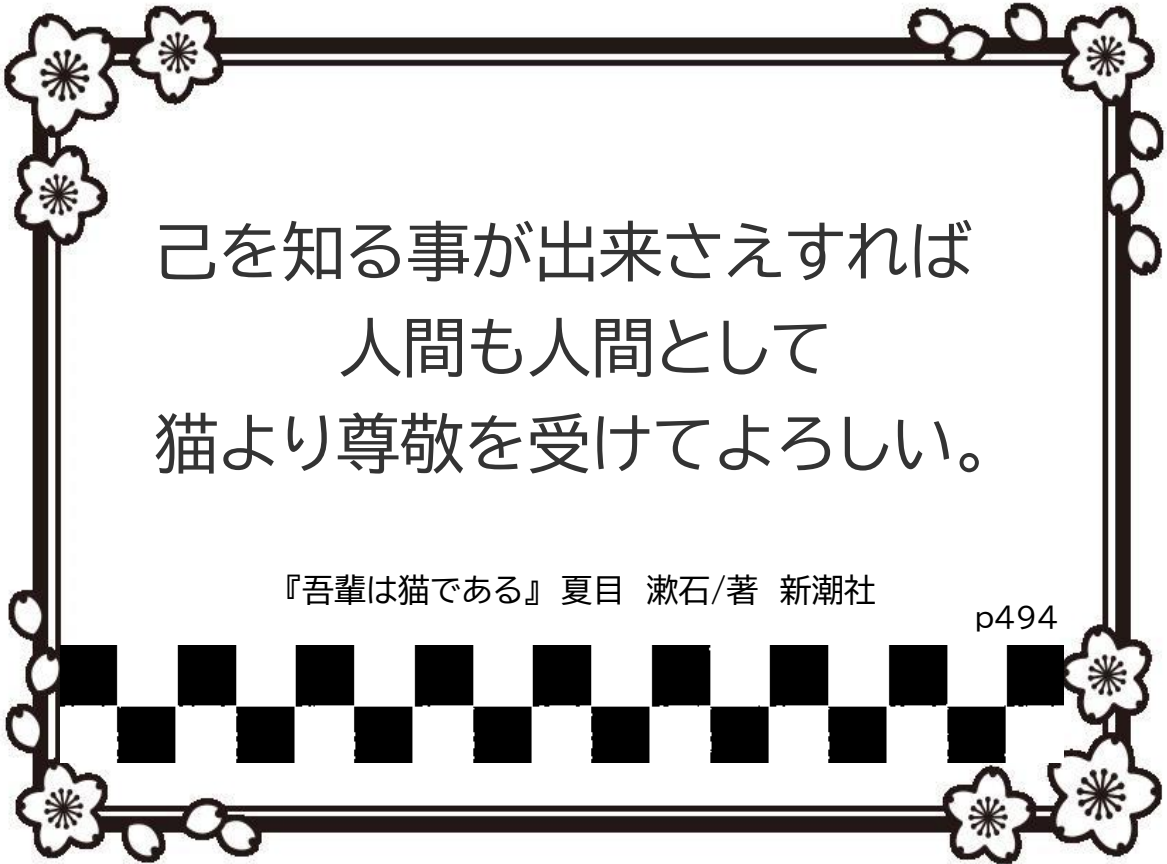
p170



音楽にこれほど魅了されても、
彼はまだ動物なのだろうか。

『変身』 カフカ/著 高橋 義孝/訳 新潮社

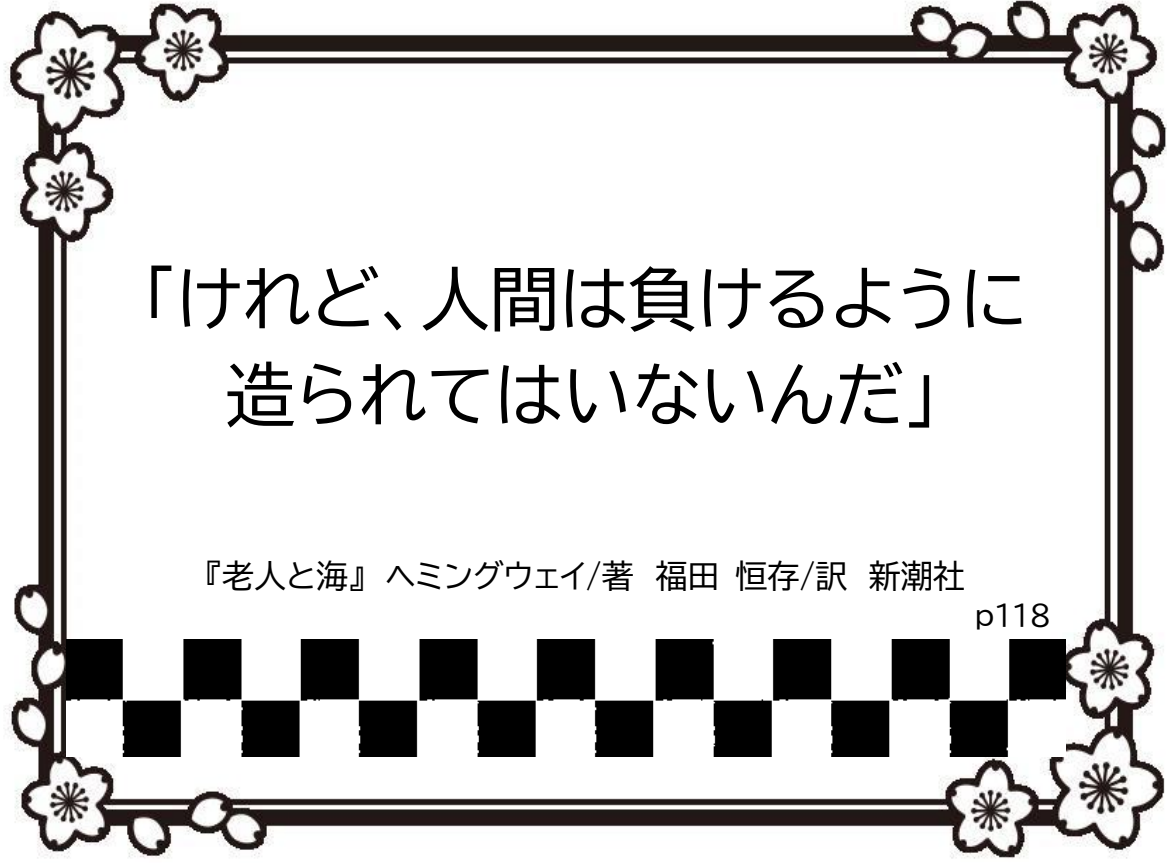
p94



己を知る事が出来さえすれば
人間も人間として
猫より尊敬を受けてよろしい。

『吾輩は猫である』夏目 漱石/著 新潮社

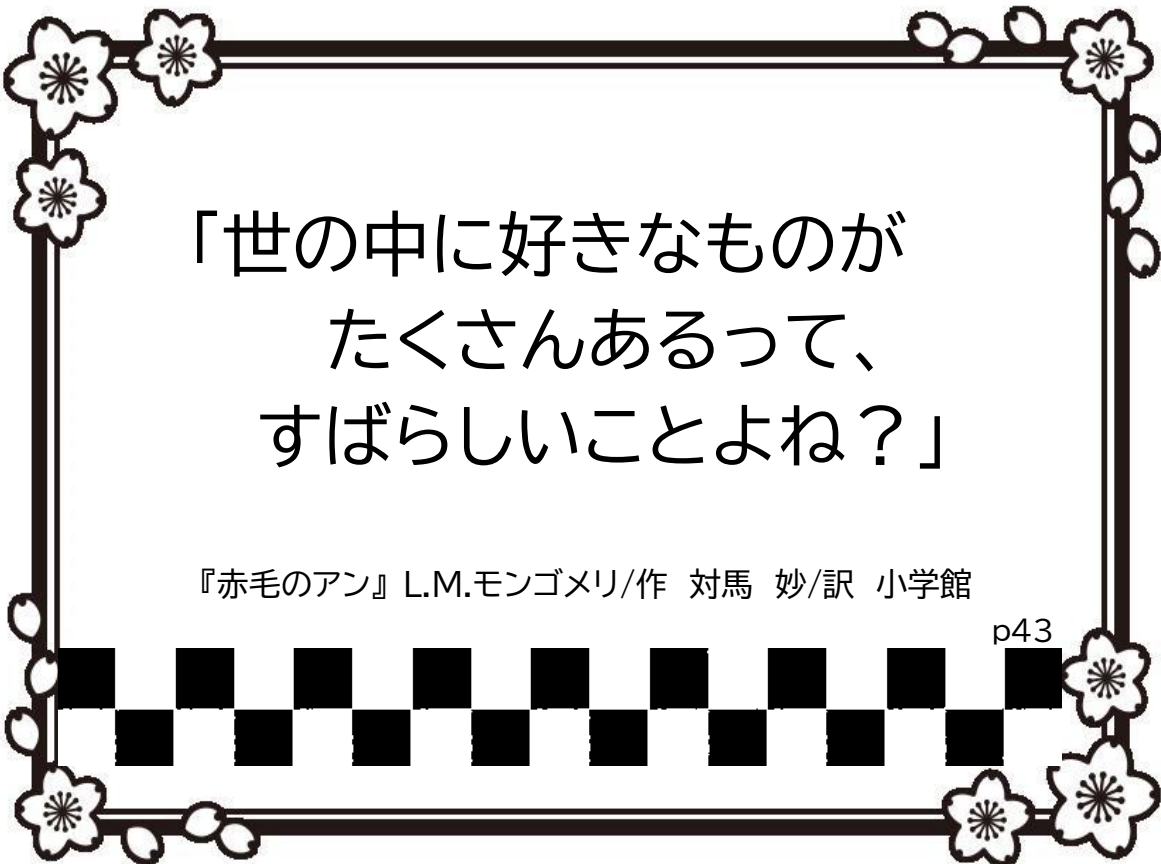
p494



「けれど、人間は負けるように
造られてはいないんだ」

『老人と海』ヘミングウェイ/著 福田 恒存/訳 新潮社

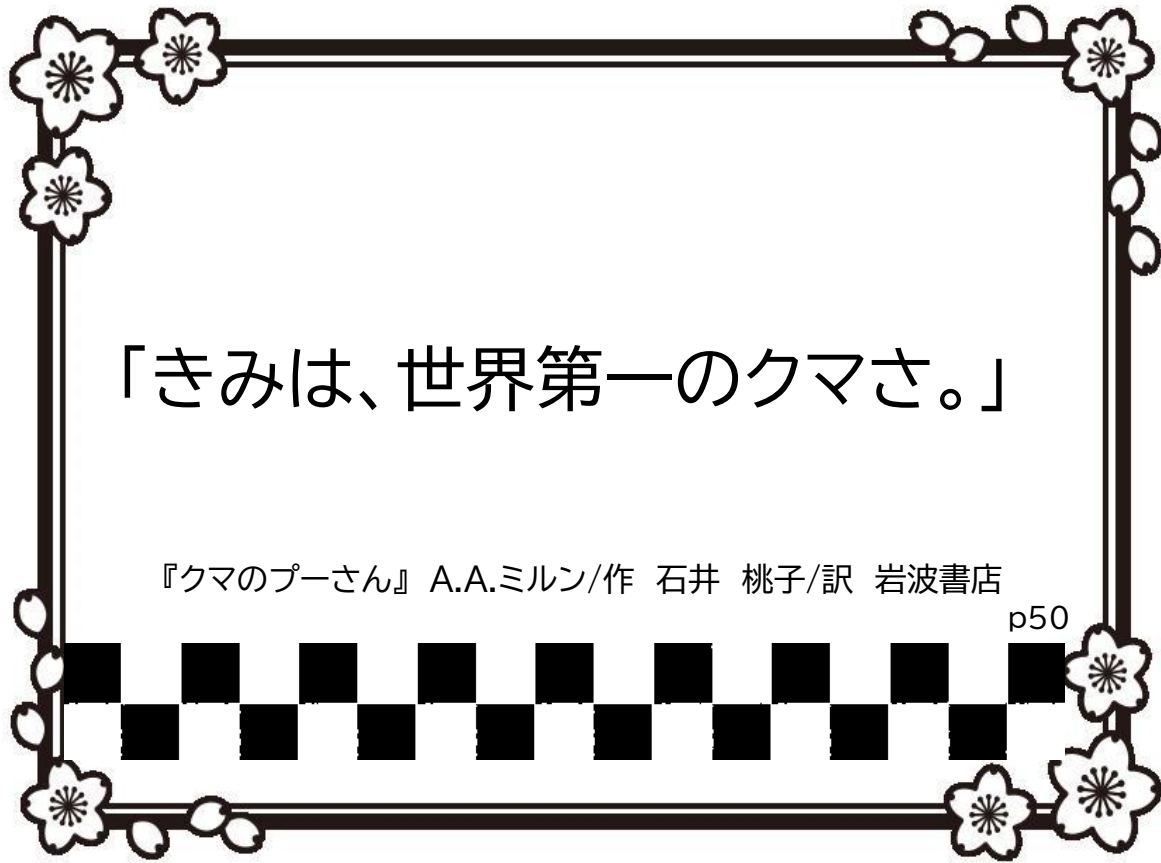
p118



「世の中に好きなものが
たくさんあるって、
すばらしいことよね？」

『赤毛のアン』 L.M.モンゴメリ/作 対馬 妙/訳 小学館

p43



「きみは、世界第一のクマさ。」

『クマのプーさん』 A.A.ミルン/作 石井 桃子/訳 岩波書店

p50



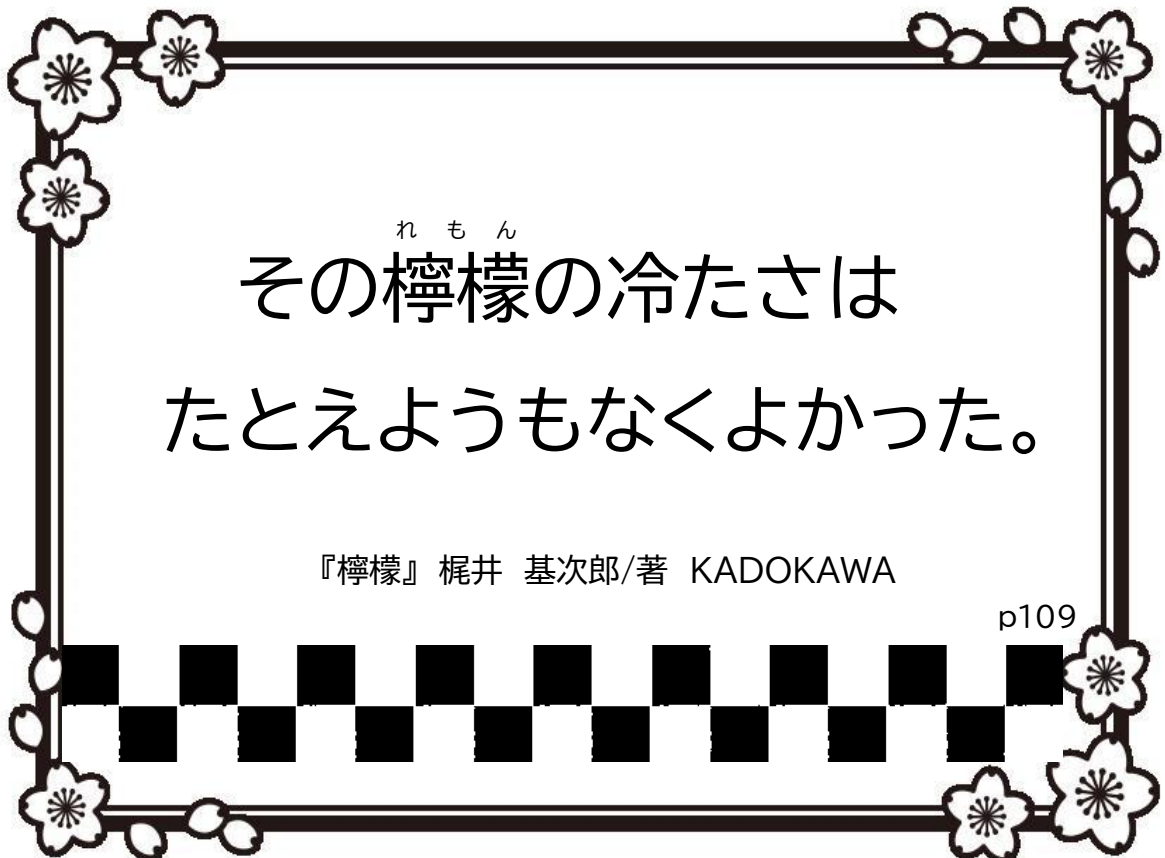
あけぼの

春は、曙。

まくらのそうし せいしょうなごん

『枕草子』 清少納言/著 角川書店/編 角川学芸出版

p9



れ も ん

その檸檬の冷たさは たとえようもなくよかった。

『檸檬』 梶井 基次郎/著 KADOKAWA

p109

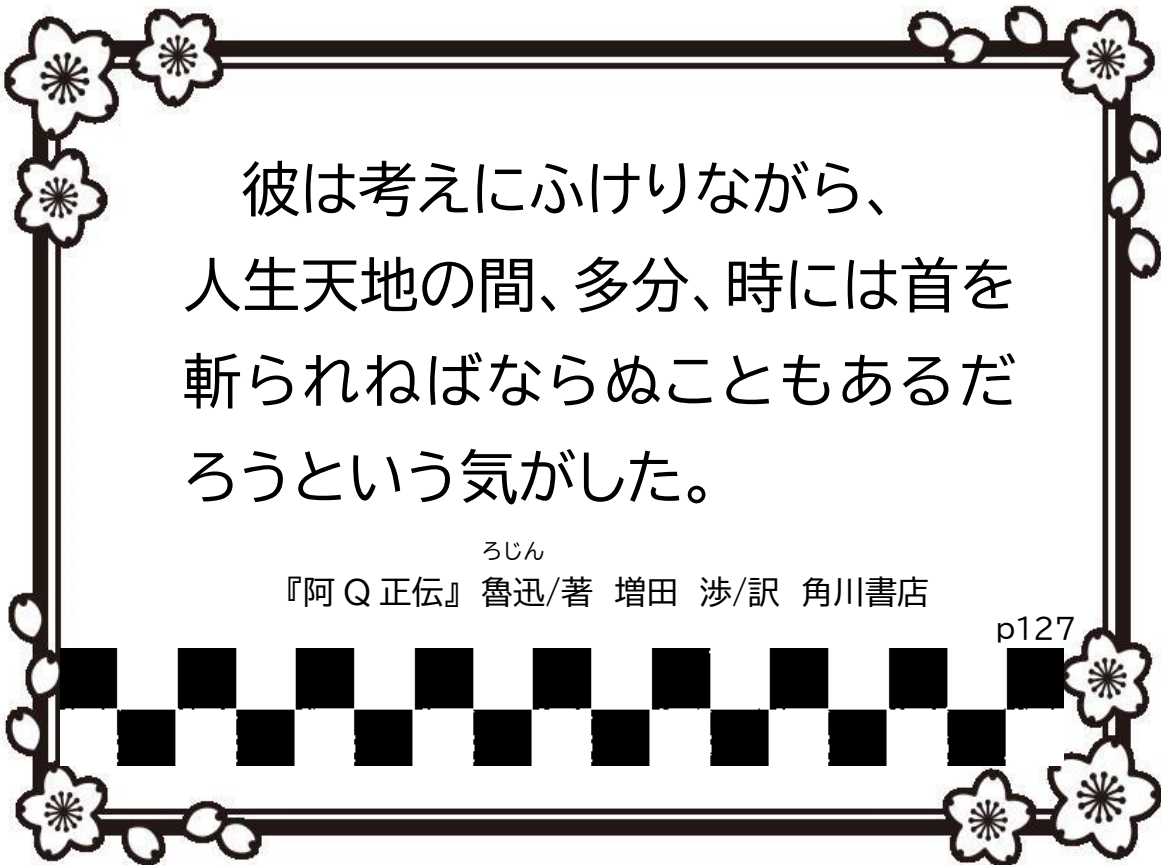
かたつぶり
舞へ舞へ蝸牛 舞はぬものならば
むま うし く
馬の子や牛の子に蹴ゑさせてん
わ
踏み破らせてん

まこと はな
実に美しく舞うたらば 華の園まで遊ばせん

りょうじんひしょう ごしらかわいん
『梁塵秘抄』後白河院/撰 植木 朝子/編 角川学芸出版 p217

か み よ た つ た が わ
ちはやぶる神代も聞かず竜田川
からくれなゐに水くくるとは

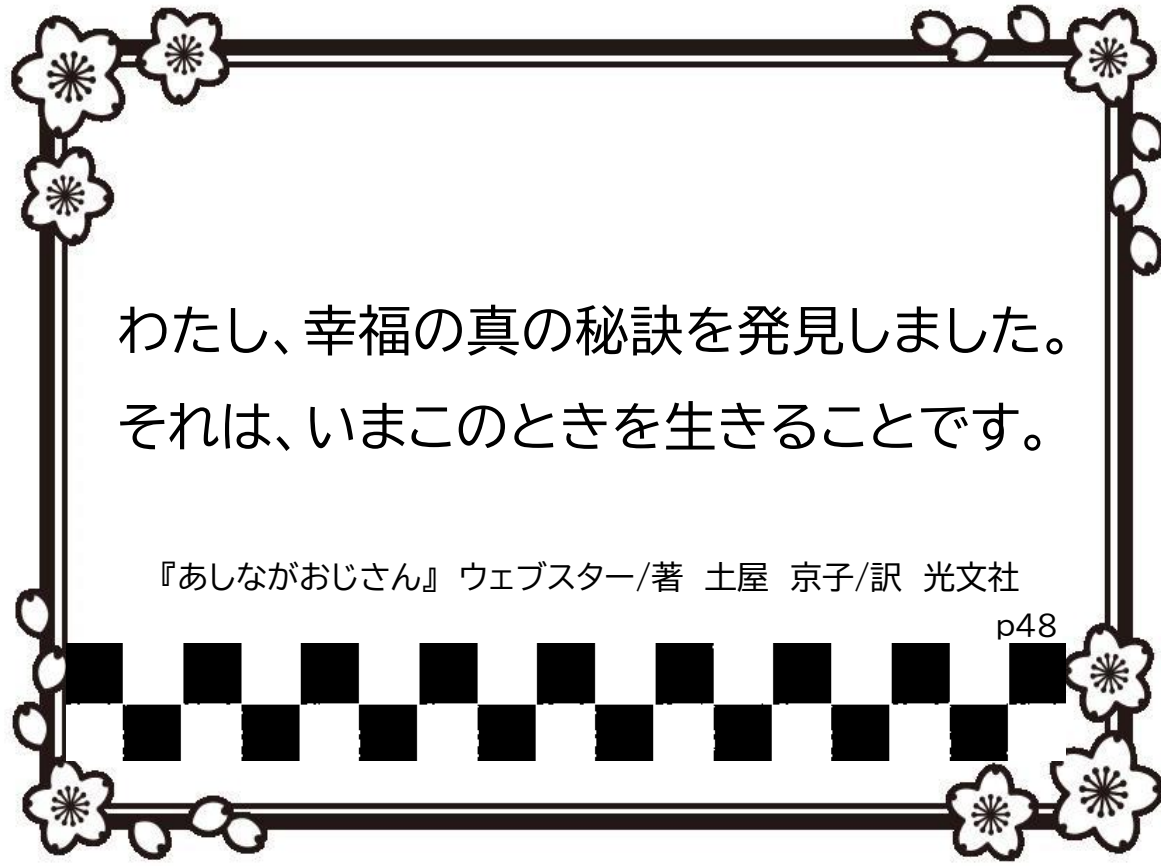
ありわらのなりひら あそん
『百人一首』在原業平 朝臣 谷 知子/編 KADOKAWA p12



彼は考えにふけりながら、
人生天地の間、多分、時には首を
斬られねばならぬこともあるだ
ろうという気がした。

ろじん
『阿Q正伝』魯迅/著 増田 渉/訳 角川書店

p127



わたし、幸福の真の秘訣を発見しました。
それは、いまこのときを生きることです。

『あしながおじさん』ウェブスター/著 土屋 京子/訳 光文社

p48

とき いた
ああ時なるかな、至れるかな、

はっけん ぐそく
八犬ここに具足して、

はっこう たま れんぐわん こう
八行の玉、聯串の功、

だい しゅくぼうむな
ちゆ大の宿望虚しからぬを、

(「八犬士集結」百二十七回)

『南総里見八犬伝』 曲亭 馬琴/作 石川 博/編 角川学芸出版

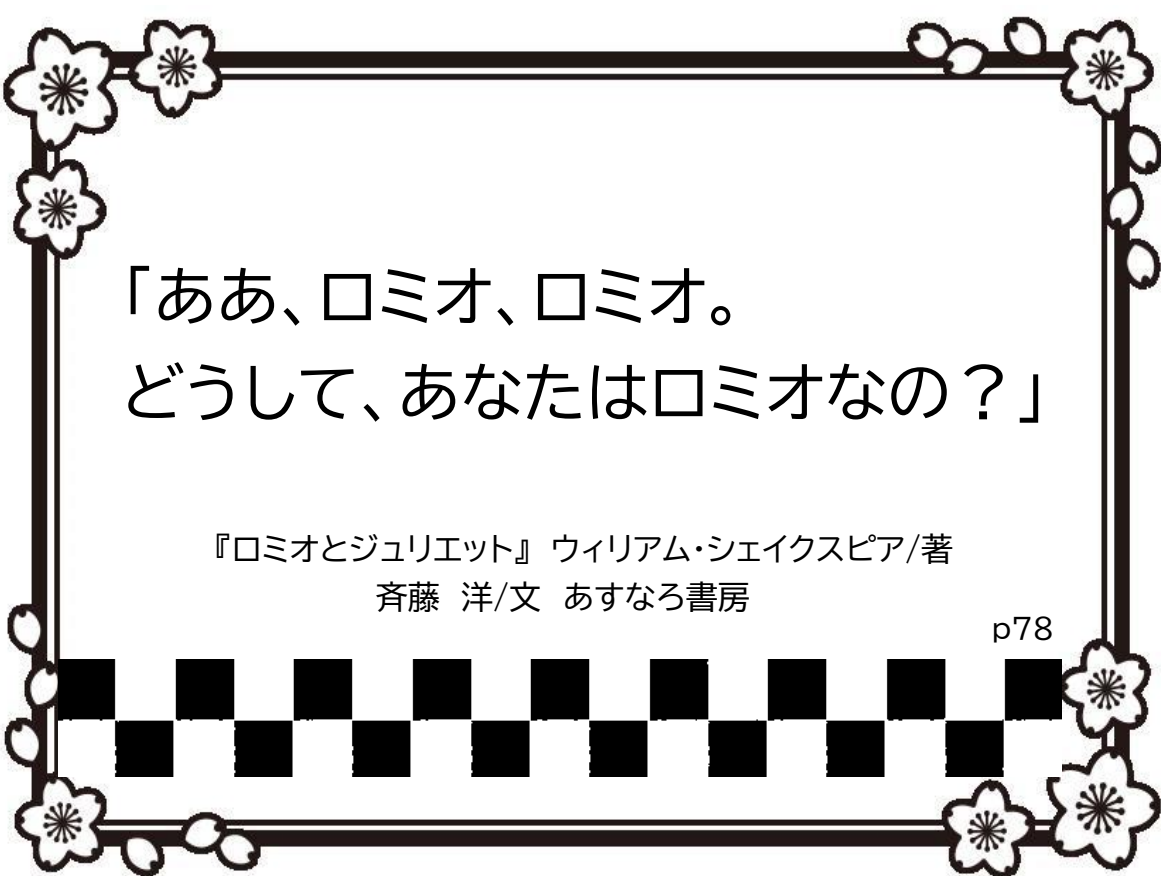
p205

わら
嗤ってくれ。

詩人に成りそこなって虎になった
哀れな男を。

『山月記』 中島 敦/著 新潮社

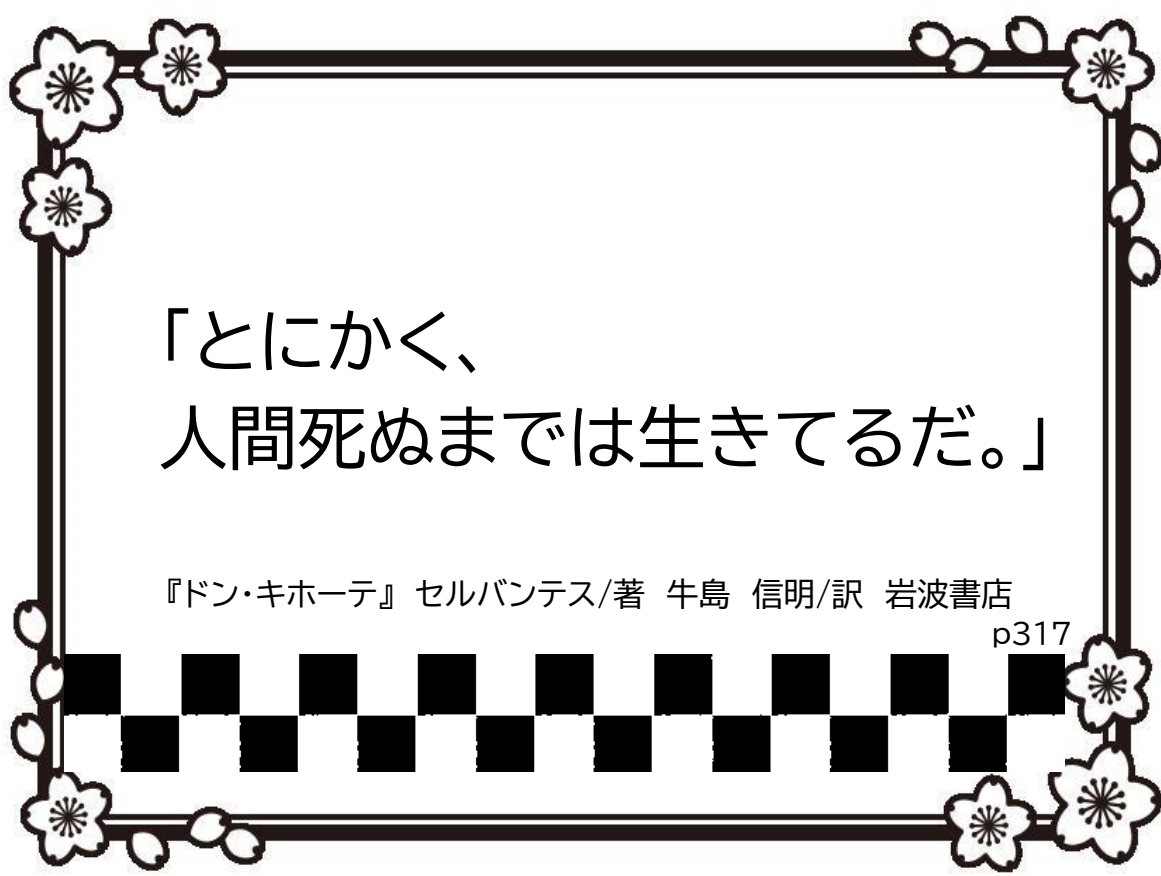
p14



「ああ、ロミオ、ロミオ。
どうして、あなたはロミオなの？」

『ロミオとジュリエット』 ウィリアム・シェイクスピア/著
斉藤 洋/文 あすなろ書房

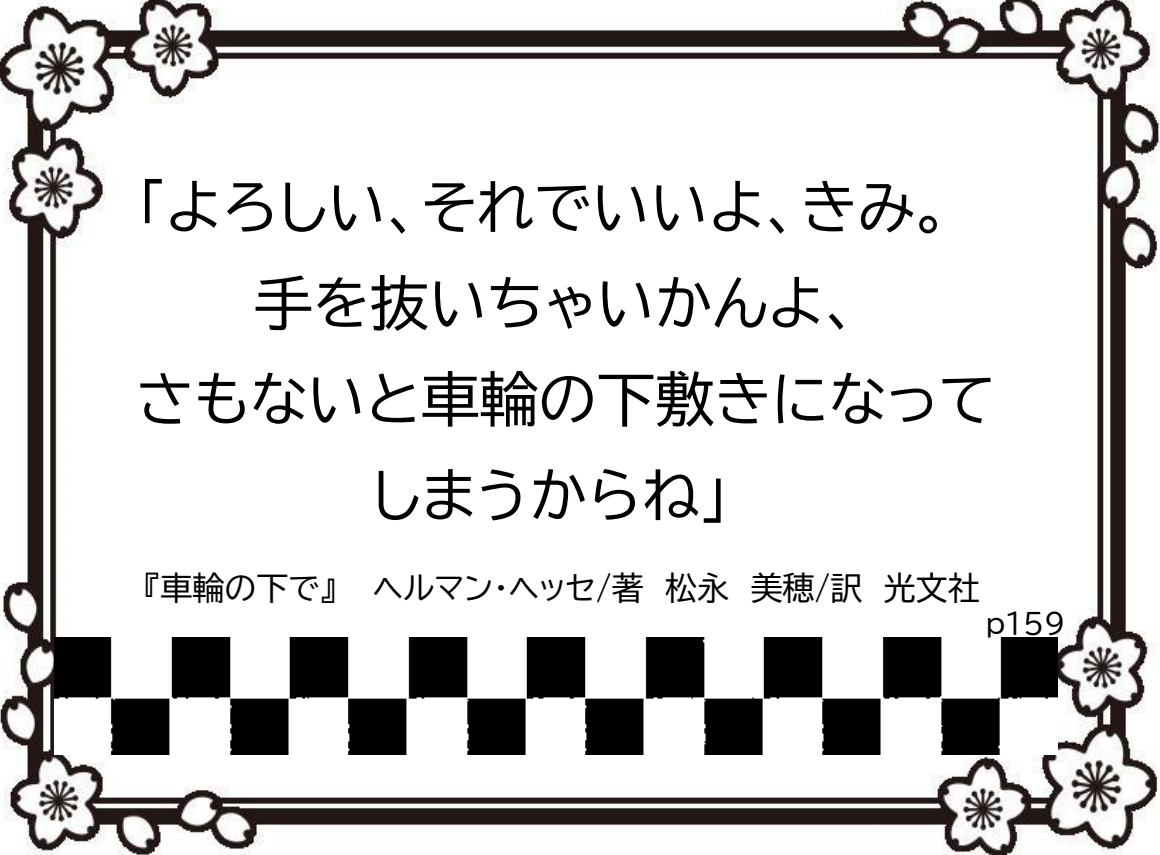
p78



「とにかく、
人間死ぬまでは生きてるだ。」

『ドン・キホーテ』 セルバンテス/著 牛島 信明/訳 岩波書店

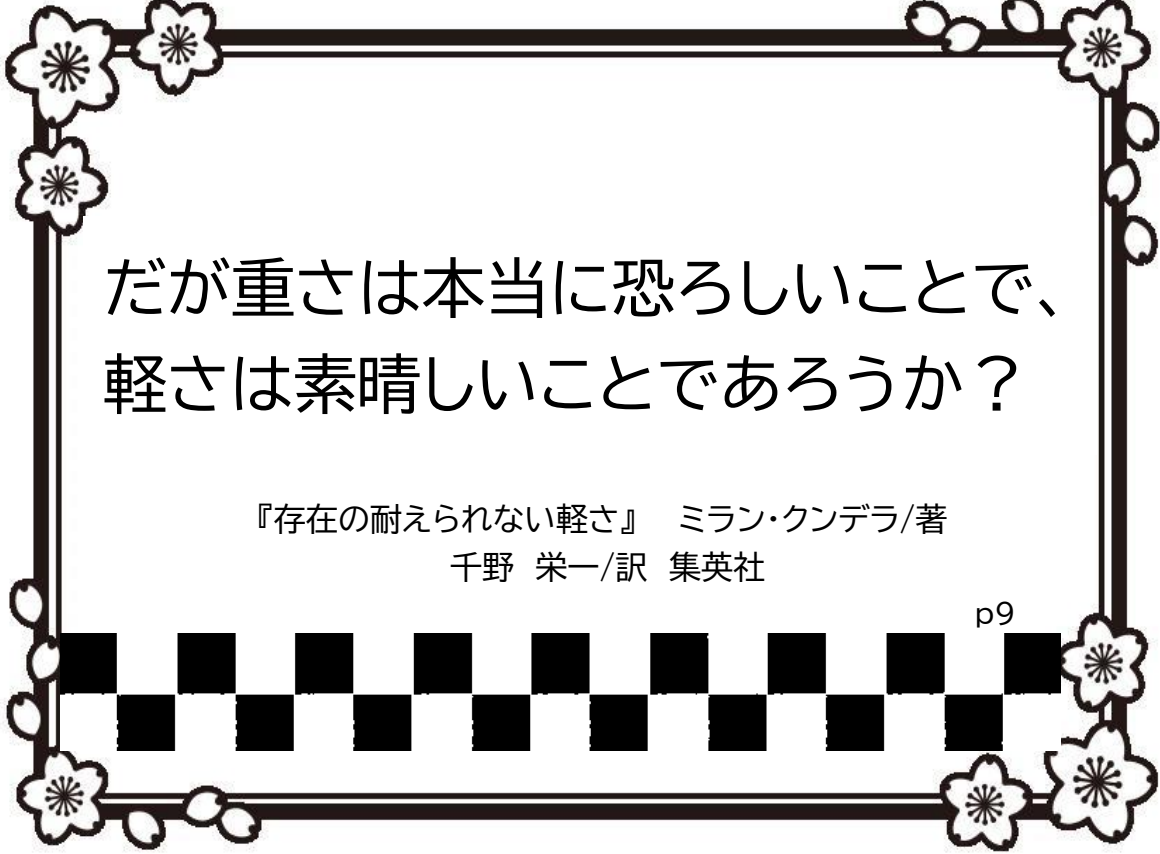
p317



「よろしい、それでいいよ、きみ。
手を抜きちゃいかんよ、
さもないと車輪の下敷きになって
しまうからね」

『車輪の下で』 ヘルマン・ヘッセ/著 松永 美穂/訳 光文社

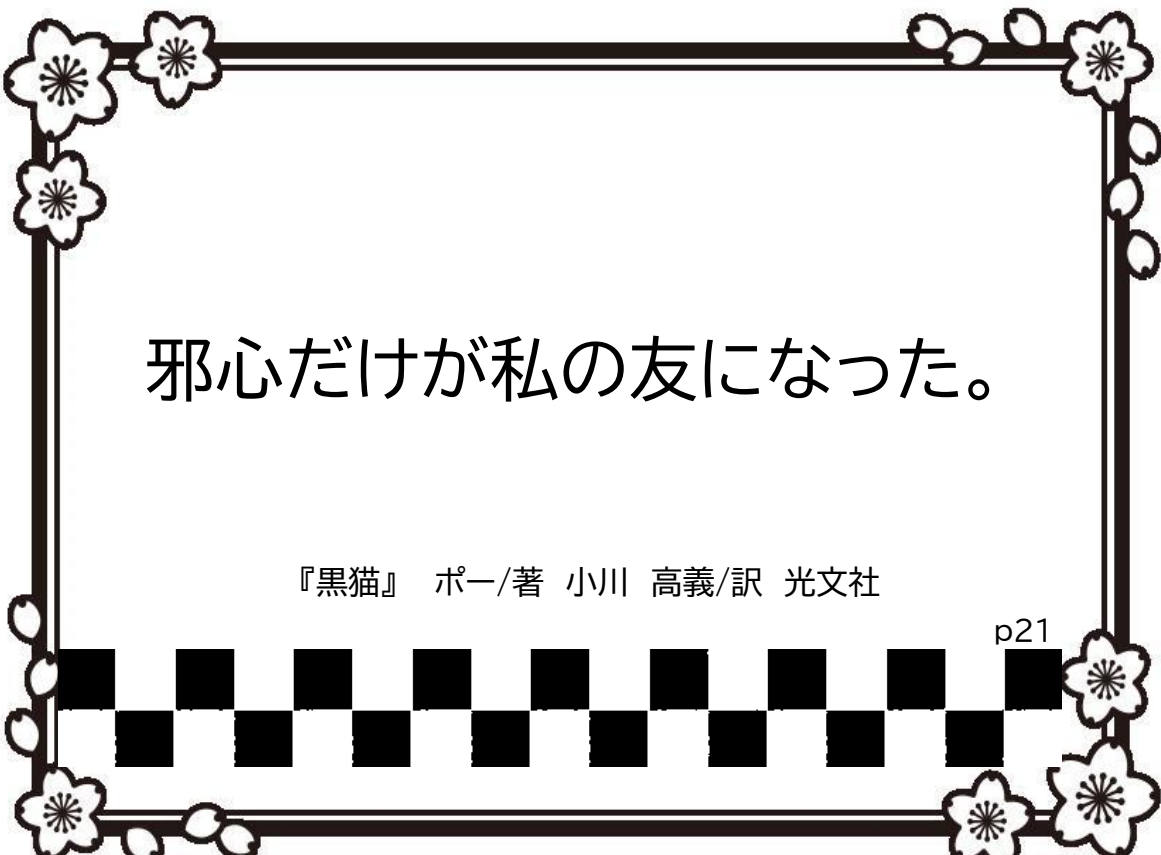
p159



だが重さは本当に恐ろしいことで、
軽さは素晴らしいことであろうか？

『存在の耐えられない軽さ』 ミラン・クンデラ/著
千野 栄一/訳 集英社

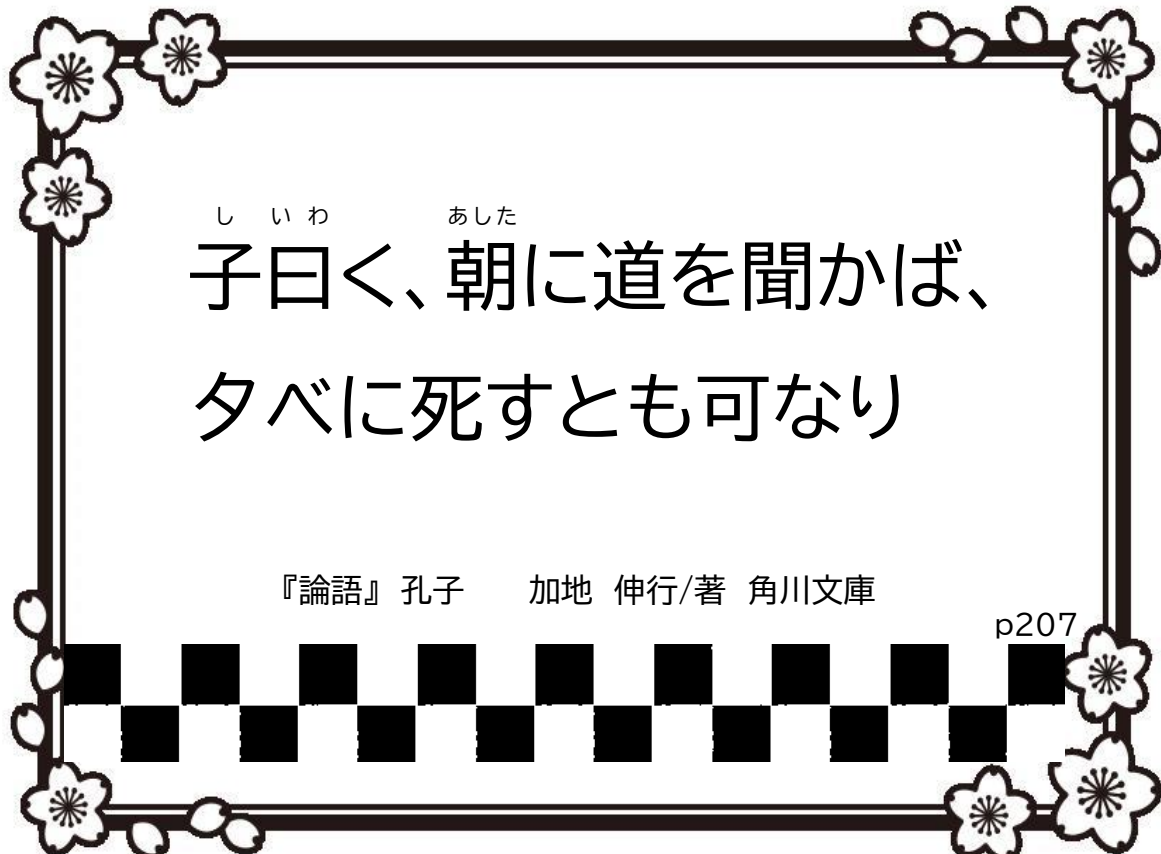
p9



邪心だけが私の友になった。

『黒猫』 ポー/著 小川 高義/訳 光文社

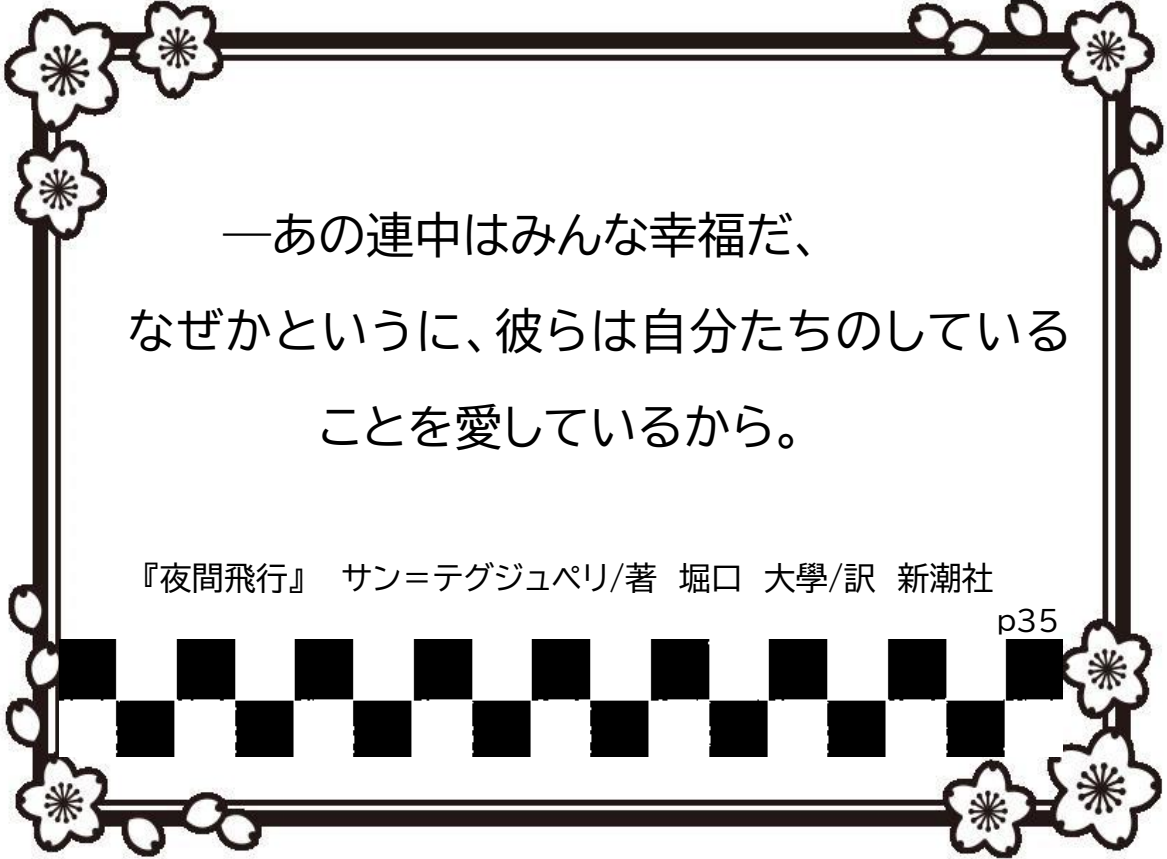
p21



し い わ あした
子曰く、朝に道を聞かば、
夕べに死すとも可なり

『論語』 孔子 加地 伸行/著 角川文庫

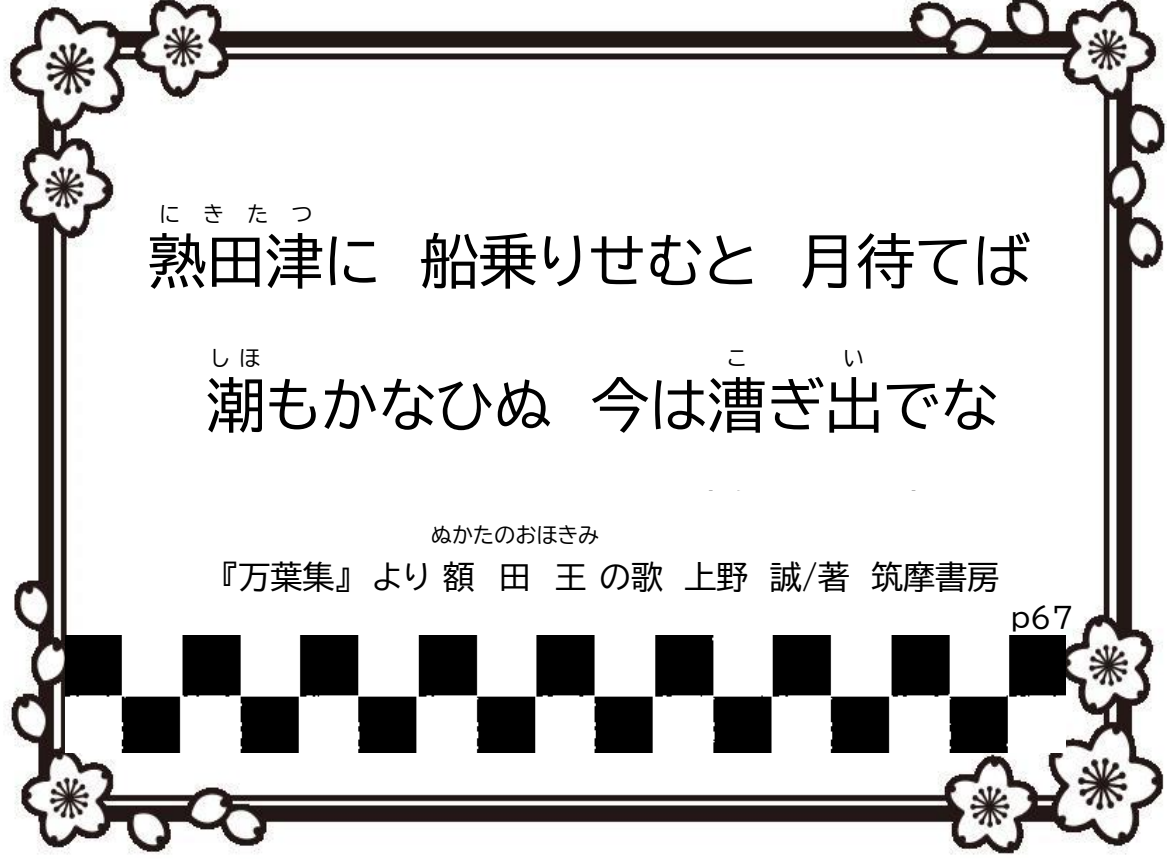
p207



—あの連中はみんな幸福だ、
なぜかというに、彼らは自分たちのしている
ことを愛しているから。

『夜間飛行』 サン＝テグジュペリ/著 堀口 大學/訳 新潮社

p35



に き た つ
熟田津に 船乗りせむと 月待てば

し ほ こ い
潮もかなひぬ 今は漕ぎ出でな

ぬかたのおほきみ
『万葉集』より 額 田 王 の歌 上野 誠/著 筑摩書房

p67

ぼくの内なる存在は、行動するときではなく、
ものの本質を手にしたときでもなく、それ以外るとき、
過去と現在の類似という奇跡が起きてはじめて、
ぼくをこの現実から逃れさせ、その都度ぼくのもとに
やってきてはその姿を見せてくれるのだ。
ひとえにこの存在だけが、ぼくにかつての日々を見出させ、
失われた時を見出させる力を持っている。

『失われた時を求めて 全一冊』 マルセル・プルースト/著
角田 光代・芳川 泰久/編訳 新潮社

p447

やまと く に
倭は 国のまほろば たたなづく

あおがき やまごも やまと うるわ
青垣 山隠れる 倭し 美し

『古事記』（歌謡番号三一） 角川書店/編 角川学芸出版

p187

だれがこまどり ころしたの？
わたし とすずめがいました

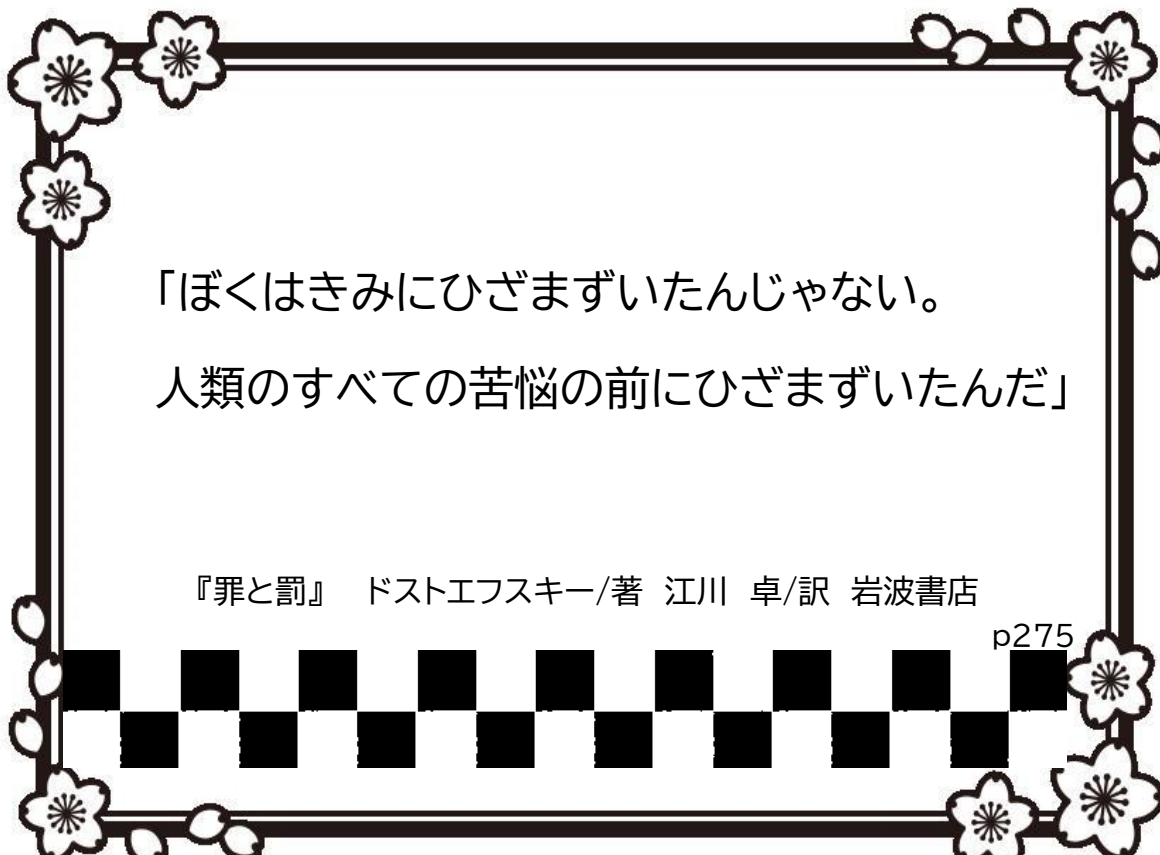
『よりぬきマザーグース』 谷川 俊太郎/訳
鷺津 名都江/編 岩波書店

p50

ぎを んしやうじや かね こゑ しよぎやうむじやう ひび
祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり、
しやらそうじゆ はな いろ じやうしやひつすい ことわり
沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。

『平家物語』 角川書店/編 角川学芸出版

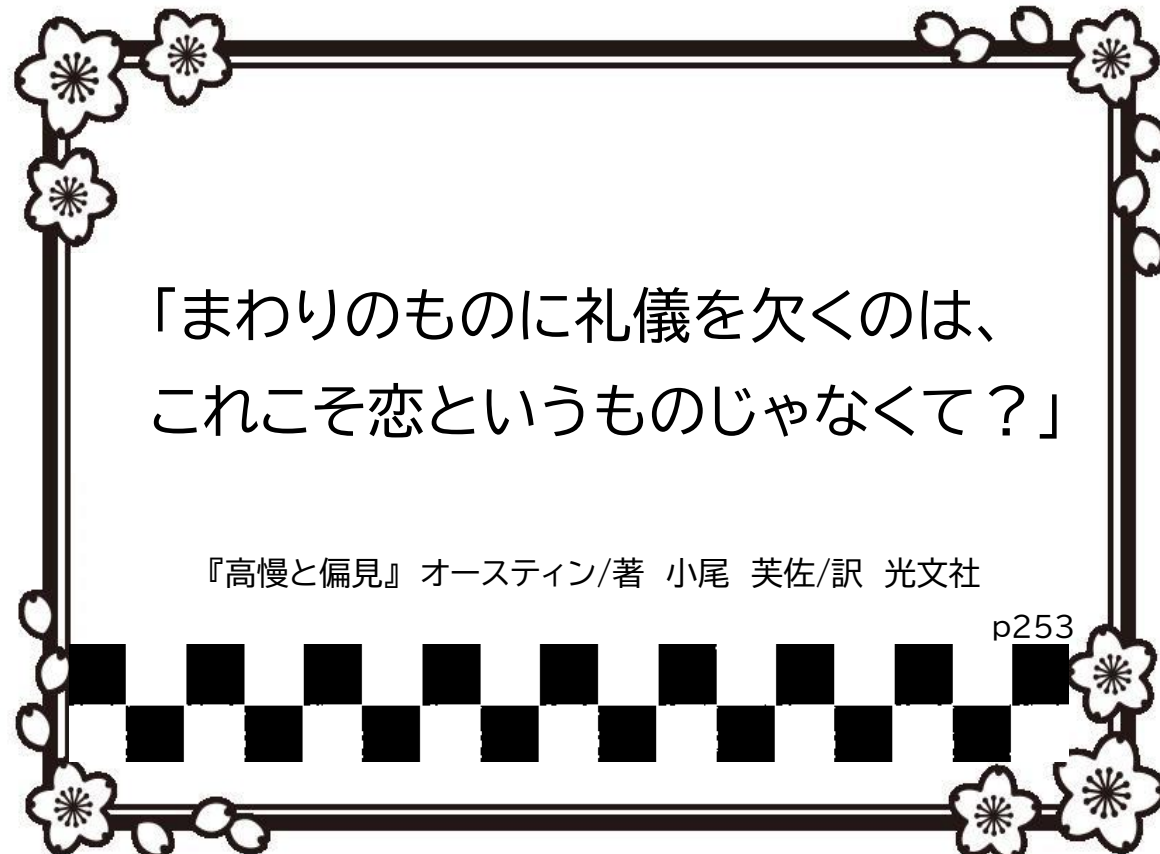
p16



「ぼくはきみにひざまずいたんじゃない。
人類のすべての苦悩の前にひざまずいたんだ」

『罪と罰』 ドストエフスキー/著 江川 卓/訳 岩波書店

p275



「まわりのものに礼儀を欠くのは、
これこそ恋というものじゃなくて？」

『高慢と偏見』 オースティン/著 小尾 芙佐/訳 光文社

p253